沼野充義　履歴・主要業績表

＊この表は，主としてロシア・中東欧関係に絞った『SLAVISTIKA』のための縮約版である。また書評，事典項目，評論・エッセイ，解説，対談・座談，マスコミ向けの啓蒙的短文などはロシア・中東欧関係であってもすべて省略した。ロシア・中東欧関係以外も含めたより詳細な表（ただし，これも網羅的なものではない）は，東京大学大学院人文社会系研究科・文学部現代文芸論研究室論集『れにくさ』第 10 号（2020 年 3 月刊）に掲載されている。本表作成に献身的に協力してくださった今井亮一，小澤裕之，邢亜南，島袋里美，下島彬，鈴木愛美，高橋知之，坪野圭介，沼野尭，Agata Bice を始めとする多くの関係者の皆様に心から感謝します。（沼野充義記）

学歴

1977 年 3 月　東京大学教養学部教養学科学士（卒業論文 Становление личности Аркадия в романе Достоевского «Подросток»）

1979 年 3 月　東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻修士課程）修士（修士論文『ユーリイ・オレーシャの創作技法　世界を見る技術』指導教授川端香男里先生）

1981 年 9 月-1985 年 7 月　ハーヴァード大学フルブライト全額給費奨学生として留学（Departmenet of Slavic Languages and Literatures,Graduate School of Arts and Sciences 博士課程）。指導教授 Jurij Striedter, Donald Fanger 二人の他，Vsevolod Setchkarev 教授(ロシア詩), Stanisław Barańczak 教授（ポーランド文学全般，特にポーランド詩）に強い影響を受ける。

1984 年 6 月　ハーヴァード大学博士論文執筆資格取得（いわゆる ABD）のうえ，修士号取得

1985 年 3 月　東京大学人文科学研究科（露語露文学専攻博士課程）単位取得満期退学

教歴

1984 年 2 月-1985 年 6 月　ハーヴァード大学，ティーチング・アシスタント（担当授業：Striedter 教授の「トルストイ」，Fanger 教授の「ドストエフスキー」）

1985 年 8 月-1989 年 1 月　東京大学教養学部，専任講師（ロシア語教室・教養学科ロシア分科）

1987 年 10 月-1988 年 9 月 ワルシャワ大学東洋学研究所, 客員講師（日本語日本文学）

1989 年 1 月-1994 年 3 月 東京大学教養学部，助教授（ロシア語教室・教養学科表象文化論）

1994 年 4 月-2004 年 3 月 東京大学文学部，助教授（スラヴ語スラヴ文学研究室および西洋近代語近代文学研究室）

2000 年 5 月-11 月 ロシア国立人文大学（モスクワ），客員研究員（国際交流基金フェロー）

2002 年 10 月-11 月 モスクワ大学アジア・アフリカ研究所，客員教授

2004 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授（スラヴ語スラヴ文学研究室および西洋近代語近代文学研究室。

2007 年 4 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部に新設された現代文芸論研究室教授。以後，一貫してスラヴ語スラヴ文学研究室教授を兼任。

2016 年 7 月 ハーヴァード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）ハーヴァード大学夏期集中セッション・セミナーリーダー

2018 年 7 月 ハーヴァード大学世界文学研究所（Institute for World Literature）東京大学夏期集中セッション・セミナーリーダー

2020 年 3 月 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部を定年退職

受賞

第 6 回木村彰一賞（1997 年）シンボルスカ詩集『終わりと始まり』の翻訳およびロシア・ポーランド文学研究の分野での著作活動に対して

ポーランド文化功労勲章（2001 年）ポーランド文化大臣より

第 24 回サントリー学芸賞（2002 年）文学・芸術部門　著書『徹夜の塊　亡命文学論』に対して

第 55 回読売文学賞評論・伝記賞（2004 年）著書『徹夜の塊　ユートピア文学論』に対して

ベネディクト・ポラク賞（2018 年）日本におけるポーランド文学普及の顕著な業績に対して

学会等での主な活動

日本ナボコフ協会　運営委員 1999 年～，事務局長 1999 年～2000 年

リェトヴァの会創設メンバー2003 年
日本ロシア文学会　会長 2009～2013 年，ロシア文学会大賞選考委員長 2015～2017 年
日本ロシア・東欧研究連絡協議会（JCREES)　代表幹事 2014～2017 年
日本学術会議　連携会員 2014 年～
日本スラヴ学研究会　会長 2015～2019 年
日本文藝家協会　会員，協会編纂物委員
日本ペンクラブ　国際委員会委員長 2015～2019 年，理事 2017～2019 年，常務理事 2019 年～

博士論文指導・主査

スラヴ語スラヴ文学専門分野課程博士指導・主査

岩本和久（1995 年）「脆弱な《私》の肖像—オレーシャの作品にみる自己愛と同一化」
前田和泉（1999 年）「マリーナ・ツヴェターエワの詩学—境界線を越える声—」（後に改稿・増補のうえ単行本『マリーナ・ツヴェターエワ』未知谷，2006 年）
斉藤毅（2000 年）「O.マンデリシュターム『Tristia』論—「故国的なもの」と「異国的なもの」」
三好俊介（2001 年）　「エヴゲーニー・バラトゥインスキー—対話の詩学—」
楯岡求美（2002 年）　「メイエルホリド演出におけるグロテスクの手法について」
金子百合子（2005 年）　「ロシア語・日本語のアスペクト意味体系における開始性」
毛利公美（2005 年）　「境界を見つめる目—ナボコフのロシア語作品をめぐって」
古賀義顕（2007 年）「現代ロシア語学のための基礎的記述法の研究」
平松潤奈　(2008 年)「寸断されたテクスト—『静かなドン』とソヴィエト文学体制の成立—」
三好（竹内）恵子（2009 年）「廃墟の詩学—ブロツキイの作品における古典古代モチーフと現代性—」（後に東京大学学術成果刊行助成を得て単行本『廃墟のテクスト—亡命詩人ヨシフ・ブロツキイと現代』成文社，2013 年）
田中まさき（2009 年）「レオーノフ『泥棒』の研究」
伊藤友計（2010 年）「革命と詩人　帝政末期からソヴェト初期の文芸論争と B.パステルナーク」
平野恵美子（2010 年）「バレエ《火の鳥》の起源——20 世紀初頭ロシア文化と帝室劇場」

（後に大幅に改稿・増補のうえ単行本『帝室劇場とバレエ・リュス――マリウス・プティパからミハイル・フォーキンへ』未知谷，2020 年）

野町素己（2011 年）「スラヴ諸語における所有文—その構造と派生的構文の比較・類型論的研究—」

中野幸男（2012 年）「記憶と表象　シニャフスキー／テルツにおける地下文学・収容所・亡命」

小松祐子（2013 年）「チャイコーフスキイのオペラ《マゼーパ》研究—プーシキンの叙事詩『ポルタヴァ』とオペラの美学—」

梶山祐治（2017 年）「ボリス・パステルナーク『ドクトル・ジヴァゴ』におけるモチーフの構造研究」

古宮路子（2017 年）「オレーシャ『羨望』草稿研究」

奈倉有里（2019 年）「アレクサンドル・ブローク　批評と詩学——焼身から世界の火災へ」

スラヴ語スラヴ文学専門分野論文博士主査

石川達夫（2009 年）「チェコ民族再生運動研究」（後に単行本『チェコ民族再生運動——多様性の擁護，あるいは小民族の存在論』岩波書店，2010 年）

服部文昭（2012 年）「ロシア語史研究における『アルハンゲリスク福音書』の意義——文章語（живая речь）の萌芽ならびに日用語の資料として——」

番場俊（2014 年）「ドストエフスキーと小説の問い」（単行本『ドストエフスキーと小説の問い』水声社，2012 年，に基づく博士論文）

現代文芸論専門分野課程博士指導・主査

秋草俊一郎（2008 年）「訳すのは「私」——ウラジーミル・ナボコフにおける自作翻訳の諸相」（後に単行本『ナボコフ　訳すのは「私」—自己翻訳がひらくテクスト』東京大学出版会，2011 年）

亀田真澄（2013 年）「五カ年計画のメディア・イメージ ——ソ連とユーゴの比較」（後に単行本『国家建設のイコノグラフィー—ソ連とユーゴの五カ年計画プロパガンダ』成文社，2014 年）

Ryan Shaldjian Morrison　ライアン・シャルジアン・モリソン（2016 年）Waves into the Dark : A Critical Study of Five Key Works from Ishikawa Jun's Early Writings

Viacheslav Surovyi ヴィヤチェスラフ・スロヴェイ（2017 年）「概念メタファー分析から文化的キーワード翻訳可能性の探求へ ——日本語、英語、ロシア語、ウクライナ語に即して」

小澤裕之（2017 年）「理知のむこう ——ダニイル・ハルムスの手法と詩学」（後に単行本『理知のむこう　ダニイル・ハルムスの手法と詩学』未知谷，2019 年）

高橋知之（2018 年）「反省と直接性のあいだ ——ベリンスキーの構想、プレシチェーエフの実践、グリゴーリエフの漂泊」（後に単行本『ロシア近代文学の青春: 反省と直接性のあいだで』東京大学出版会，2019 年）

片山耕二郎（2019 年）「芸術家小説『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』の成立と性質」

邵丹（2019 年）「現代日本における外国文学の受容と機能——1970 年代のアメリカ文学の翻訳に即して」

今井亮一（2020 年）「路地と世界——世界文学論から読む中上健次作品研究」

主要業績

A 単著書

『屋根の上のバイリンガル』筑摩書房，1988 年 4 月。1996 年 3 月，白水社より改訂増補版。

『永遠の一駅手前　現代ロシア文学案内』作品社，1989 年 6 月（本書のうち 2 章が «Иностранная литература»（モスクワ） 1990 年 2 月号にロシア語訳で掲載された）。

『夢に見られて　ロシア・ポーランドの幻想文学』作品社，1990 年 8 月。

『ＮＨＫ　気軽に学ぶロシア語』日本放送出版協会，1993 年 3 月。2004 年 2 月，改訂新版として『ＮＨＫ　CD ブック　気軽に学ぶロシア語』。

『スラヴの真空　東欧･ロシアの 20 世紀末を遊覧する』自由国民社, 1993 年 10 月。

『モスクワーペテルブルグ縦横記』岩波書店，1995 年 3 月。

『W文学の世紀へ　境界を越える日本語文学』五柳書院，2001 年 12 月。

『徹夜の塊　亡命文学論』作品社，2002 年 2 月。

『徹夜の塊　ユートピア文学論』作品社，2003 年 2 月。

『100 分 de 名著　チェーホフ「かもめ」』ＮＨＫ出版，2012 年 9 月。

『世界文学から／世界文学へ　文芸時評の塊　1993-2011』作品社，2012 年 10 月。

『チェーホフ　七分の絶望と三分の希望』講談社，381 頁，2016 年 1 月。

『100 分 de 名著　スタニスワフ・レム「ソラリス」』NHK 出版，2017 年 12 月。
『徹夜の塊　世界文学論』作品社，2020 年 4 月。

B 共著書

富山太佳夫・小池滋他編『城と眩暈　ゴシックを読む』国書刊行会，1982 年 9 月（「彷徨と喪神　ロシア文学におけるゴシック・ロマンスの系譜」265-289 頁を執筆）。

川端香男里編『ロシア文学史』東京大学出版会，1986 年 3 月。第 2 刷，1986 年 7 月（第 VII 章「ソヴィエト時代の文学」の第 6 節「1960 年代から今日まで」324-334 頁，および第 2 刷の「補　ペレストロイカ以降」334-342 頁を執筆）。

池内紀・種村季弘ほかと共著『バロックの愉しみ』筑摩書房，1987 年 7 月（第 8 章「文法の迷宮　スラヴ圏のバロック文学」205-228 頁を執筆）。

和田春樹編『ペレストロイカを読む　再生を求めるソ連社会』御茶の水書房，1987 年 9 月（解説「よみがえる言葉」114-118 頁を執筆，またチンギス・マイトマートフ「断頭台」156-166 頁を沼野恭子と共訳）。

袴田茂樹編『もっと知りたいソ連』弘文堂，1988 年 11 月（「社会の中の文学」273-300 頁，「映画の大国」301-312 頁を執筆）。

青山南・江中直紀・富士川義之・樋口大介と共著『世界の文学のいま』福武書店，294 頁，1991 年 11 月 25 日刊（全 40 章のうち現代ロシア文学関係の 8 章，全体の約 5 分の 1 相当を執筆）。

川端香男里・金沢美知子編著『ロシア文学』放送大学教育振興会，1994 年 3 月（第 15 章「現代のロシア文学」129-137 頁を執筆）。

加藤光也編著『今日の世界文学』放送大学教育振興会，1994 年 3 月（第 3 章「雪どけからペレストロイカへ　ロシア文学」32-42 頁，第 4 章「もう一つのヨーロッパ文学を求めて　東欧文学」43-52 頁を執筆）

ワタリウム美術館編『ロトチェンコの実験室』新潮社，1995 年 11 月（「軽やかな前衛　ソヴィエト文化史の中のロトチェンコ」113-120 頁を執筆）。

望月哲男・亀山郁夫・井桁貞義ほかと共著『現代ロシア文化』国書刊行会，2000 年 2 月（「ロシア文学の境界　どこからどこまでがロシア文学なのか」37-77 頁を執筆）。

楯岡求美と共著『ロシア文化事情調査報告書』国際交流基金（部内資料・非売品），2000 年 3 月（全体にわたって共同執筆）。

沓掛良彦編『詩女神（ミューズ）の娘たち　女性詩人，十七の肖像』未知谷，2000 年 9 月（「ヴィスワヴァ・シンボルスカ」321-347 頁を執筆）。

宮本久雄・岡部雄三編『「語りえぬもの」からの問いかけ』講談社，2002 年 3 月（第 11 講「「言い表せないもの」の詩学　チュッチェフ「沈黙！」の逆説」206-239 頁を執筆）。

マイクロソフト製作『エンカルタ百科事典』，2003 年 6 月（『罪と罰』の項目を執筆）。

柴宜弘編『バルカンを知るための 65 章』明石書店，2005 年 4 月（「「世界文学」としてのバルカン文学」302-306 頁を執筆）。

沼野恭子と共著『世界の食文化⑲　ロシア』農文協，297 頁，2006 年 3 月 10 日刊。

池内紀・大石和欣・工藤庸子・柴田元幸と共著『世界の名作を読む』日本放送出版協会，2007 年 4 月（「4　ドストエフスキー『罪と罰』」37-49 頁，「5　チェーホフ『ワーニカ』『可愛い女（ひと）』『犬を連れた奥さん』」50-62 頁を執筆）。

大江健三郎ほかと共著『21 世紀ドストエフスキーがやってくる』集英社，2007 年 6 月（「さまざまな声のカーニバル　ドストエフスキー研究と批評の流れを瞥見する」37-48 頁を執筆, また大江健三郎との対談「ドストエフスキーが 21 世紀に残したもの」110-143 頁も所収）。

宇山智彦編『講座スラブ・ユーラシア学２　地域認識論　多民族空間の構造と表象』講談社，2008 年 2 月（「第三章　現代中欧文学と地域アイデンティティー〈中（東）欧意識〉再検討の試み」116-148 頁を執筆）。

柴田元幸・野崎歓と共著『文学の愉しみ』日本放送出版協会，2008 年 3 月（「10　ロシア文学」116-129 頁，「11　東欧文学」130-143 頁，「12 世界文学」144-159 頁，「14 日本の作家を迎えて③ゲスト―池澤夏樹さん」175-190 頁を執筆，また柴田元幸・野崎歓とともに「15　まとめ（共同討論）」191-198 頁に参加）。

加藤有子編『ブルーノ・シュルツの世界』成文社，2013 年 11 月（「魂の親和力が形づくる星座　ブルーノ・シュルツと世界文学」177-207 頁を執筆）。

Joachim Küpper, ed., *Approaches to World Literature*, Berlin: Akademie Verlag, 2013 (“Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature: Toward a Third Vision,” 147-166 頁を執筆).

野崎歓編『文学と映画のあいだ』東京大学出版会，2013 年 6 月（「アヴァンギャルドと古典の間の巨大な振幅　ここでしか教えてもらえない，ロシア文芸映画を観る五つの効用」107-128 頁を執筆）。

国際学会 proceedings，Международная конференция «Диалог армянской, русской и японской культур: Опыт сравнительного анализа»，Yerevan: RAU Publishing House ，141 頁，2013 年 12 月（99-104 頁を分担執筆)。

秋山聰・野崎歓編『人文知２　死者との対話』東京大学出版会，2014 年 11 月（第 8 章「復活の夢と不死のユートピア統計としての　大量死を超えて（ロシア・東欧文学の場合）」181-202 頁を執筆）。

工藤庸子・池内紀・柴田元幸と共著『世界の名作を読む　海外文学講義』角川ソフィア文庫，2016 年 8 月（第 5 章と第 6 章，89-123 頁を執筆）。

藤井光編『文芸翻訳入門』フィルムアート社，2017 年 3 月（「なぜ古典新訳は次々に生まれるのか？」53-80 頁を執筆）。

亀山郁夫と共著『ロシア革命 100 年の謎』河出書房新社，2017 年 10 月。

C 編著・共編著・監修

C-1　編著

『ロシア怪談集』河出書房新社，1990 年 5 月（編者あとがき「ロシアの怪談？」422-430 頁を執筆）。

『東欧怪談集』河出書房新社，1995 年 1 月（編者あとがき「形式と混沌のはざまで」419-429 頁を執筆）。

『未来の後に　ロシア文化研究の新しいパースペクティヴ』東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学沼野充義研究室（自家版・非売品），1996 年 6 月（「はじめに」5-10 頁を執筆）。

『ユートピアへの手紙　世界文学からの 20 の声』河出書房新社，1997 年 1 月（編者の依頼に応じて書かれた外国作家 20 名，計 21 編のエッセイの翻訳と解題を収める。分量的には解題が本全体の約 2 分の 1 を占め，すべて単独執筆。エッセイのうち 11 編を翻訳，1 編を共訳）。

『イリヤ・カバコフの芸術』五柳書院，1999 年 8 月（第 1 部「イリヤ・カバコフの芸術」7-41 頁を執筆）。

『ユダヤ学のすべて』新書館，1999 年 12 月（序文「あなたはユダヤ人になれますか？」8-22 頁の他，「ヤコブソン」「シャガール」「ユダヤ文学は存在するか」「マンデリシュターム」「シュルツ」「バーベリ」「ソロス」の 7 項目 8 頁分を執筆）。

『多分野交流演習論文集　とどまる力と越え行く流れ――文化の境界と交通』東京大学大学院人文社会系研究科多分野交流プロジェクト，2000 年 3 月（「はじめに」1-

2 頁，巻頭論文「とどまる力と越え行く流れ」3-11 頁，「世界の中の日本文学　越境，それとも境界の変更？」179-193 頁を執筆）。

Теория катастрофы. Современная японская проза. М., «Иностранка», 2003（国際交流基金との共同出版による現代日本小説集『カタストロフの理論　現代日本小説』〔ロシア語訳〕。編者として作品を選定，序文を執筆）.

『未来を拓く人文・社会科学 15　芸術は何を超えていくのか？』東信堂，2009 年 3 月（「はじめに　境界とアイデンティティ，あるいは「一」と「多」の倫理に向けて」1-4 頁を執筆，また「《シンポジウム》未来への郷愁　超えていくもの/とどまるもの」（多和田葉子・沼野充義・細川周平・楯岡求美・齋藤由美子）172-196 頁を所収）。

『世界は文学でできている　対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義』光文社，2012 年 1 月。（リービ英雄，平野啓一郎，ロバート・キャンベル，飯野友幸，亀山郁夫との対話形式の講義集。「おわりに　「三・一一後」の世界文学を読むために」360-374 頁を執筆。）

『やっぱり世界は文学できている 対話で学ぶ〈世界文学〉講義 2』光文社，2013 年 11 月（亀山郁夫，野崎歓，都甲幸治，綿矢りさ，多和田葉子との対話形式の講義集。「おわりに　あえて文学を擁護する」349-364 頁を執筆）。

『それでも世界は文学でできている　対話で学ぶ〈世界文学〉講義 3』光文社，2015 年 3 月（加賀乙彦，田原×谷川俊太郎，辻原登，ロジャー・パルバース，アーサー・ビナードとの対話形式の講義集。「二〇一四年世界文学の旅　あとがきに代えて」269-291 頁を執筆）。

『8 歳から 80 歳までの世界文学入門　対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義 4』光文社，2016 年 8 月（池澤夏樹，小川洋子，青山南，岸本佐知子，マイケル・エメリックとの対話形式の講義集。「二〇一五年にかけて考えたこと　あとがきに代えて」315-340 頁を執筆）。

『つまり，読書は冒険だ。対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義 5』光文社，2017 年 3 月（川上弘美×小澤実，小野正嗣，張競，ツベタナ・クリステワとの講義形式の講義集。ならびに，柳原孝敦・阿部賢一・亀田真澄・奈倉有里などとのシンポジウムを所収。「あとがき　二十六回の「対話」を終えて」378-381 頁を執筆）。

World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon (Proceesings), The University of Tokyo: Department of Contemporary Literary Studies, 2018.3.

C-2　共編著

大岡信・奥本大三郎・川村二郎・小池滋と共編『世界文学のすすめ』岩波書店，1997 年 10 月（共編者全員による巻頭座談会「世界文学のすすめ」11-60 頁に参加，「アンナ・カレーニナ」271-280 頁を執筆）。

越川芳明・柴田元幸・野崎歓・野谷文昭と共編『世界×現在×文学　作家ファイル』国書刊行会，1997 年 10 月。

Новая японская проза. Он/Она. В 2 томах. Составители: Мицуёси Нумано и Григорий Чхартишвили. Москва: Издательство «Иностранка», 2001.（グリゴーリイ・チハルチシヴィリと共編　『新しい日本小説』「彼」「彼女」全 2 巻，モスクワ，イノストランカ社, 2001 年 3 月。«Он»「彼」の巻に巻頭論文 «Не только самураи. Про женоподобных японских мужчин и немножко странную литературу» (стр. vii-xxx) を執筆。）

安宇植・池内紀・池澤夏樹ほか 25 名との共同編集委員『週刊朝日百科　世界の文学』朝日新聞社，1999 年 7 月 18 日-2001 年 11 月 11 日刊，全 120 号。全体の企画・編集に参加。以下の 4 号の責任編集者を務める。

第 19 号「ヨーロッパⅢ　⑨ＨＧウェルズ，ジュール・ヴェルヌほか　科学と文学の出会い」3－257-3＝288 頁，1999 年 11 月 21 日刊。

第 71 号「ヨーロッパⅤ　①マヤコフスキー，ゴーリキーほか　ロシア革命の光と闇」5－001-5＝032 頁，2000 年 11 月 26 日刊。

第 78 号「ヨーロッパⅤ　⑧パステルナーク，スタニスワフ・レムほか　もう一つのヨーロッパを求めて」5—225-5—256 頁，2001 年 1 月 21 日刊。

第 120 号「文学はどこへ向かうか」（この号のみリービ英雄と共同責任編集）12－289-12—320 頁，2001 年 11 月 11 日刊。

小森陽一・富山太佳夫・兵藤裕己・松浦寿輝との共同編集委員『岩波講座　文学』岩波書店，2002 年 10 月-2004 年 5 月，13 巻＋別巻 1。

第 3 巻『物語から小説へ』（2002 年 10 月）に巻頭論文「まえがき　これから先も当分死ぬことのない小説のために」1-15 頁を執筆。

第 8 巻『超越性の文学』（2003 年 8 月）に「まえがき　日常を超えたものと向き合うために」1-16 頁，「6 ロシア・ユートピアニズムの詩学」133-155 頁を執筆。

第 6 巻『虚構の愉しみ』（2003 年 12 月）に「あるラディカルな相対主義者の肖像　スタニスワワ・レム論」219-239 頁を執筆。

別巻『文学理論』（2004 年 5 月）に「まえがき　理論を携え，新しい世界文学に向けて旅立とう」1-17 頁を執筆。

柴田元幸・藤井省三・四方田犬彦と共編『世界は村上春樹をどう読むか』文藝春秋社，2006 年 10 月。

若島正と共編，*Revising Nabokov Revising: Proceedings of the International Nabokov Conference in Kyoto*, Kyoto: The Nabokov Society of Japan, 2011（“On Stylistic Exuberance: Nabokov’s *Gift* as a Russian Novel,” pp.63-69 を執筆）。

Numano, Mitsuyoshi, et al. eds., *Russian Literature and East Asia (Proceeings of the Panel at ICCEES Wolrd Congress VIII)*, Stockholm, 2011.3.

Numano, Mitsuyoshi, et al. eds., Русская литература как социальный институт (Proceedings of the Conference at the University of Tokyo), 2011.3.

沼野充義ほか編『本郷の春　ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる連続講義の記録』2011 年 3 月。

ドミトリー・バグノポリスキーと共編『ヴェルボンド』（1 号），2011 年 6 月。

若島正と共編『書きなおすナボコフ，読みなおすナボコフ』研究社，2011 年 6 月（「過剰な文体的豊饒さ　『賜物』はどのようなロシアで書かれているのか」281-294 頁を執筆，また若島正との対談「ロシア作家としてのナボコフ　『賜物』のベルリンから『ロリータ』のアメリカへ」295-324 を所収，若島正との「編者あとがき」325-329 頁を共著）。

塩川伸明・小松久男との編集委員『ユーラシア世界』東京大学出版会，2012 年 5 月-9 月，全 5 巻。全巻にわたって共編。各巻の詳細は以下の通り。

『ユーラシア世界①　〈東〉と〈西〉』（この巻は宇山智彦も編者），2012 年 5 月。

『ユーラシア世界③　記憶とユートピア』2012 年 6 月

『ユーラシア世界②　ディアスポラ論』2012 年 7 月（「総論　ディアスポラ論」1-17 頁，および「境界を越えていくロシア・東欧作家たち　比較亡命文学論の試み」21-49 頁を執筆）。

『ユーラシア世界④　公共圏と親密圏』（この巻は松井康浩も編者），2012 年 9 月。

『ユーラシア世界⑤　国家と国際関係』2012 年 9 月。

奥彩子，西成彦と共編『東欧の想像力　現代東欧文学ガイド』松籟社，2016 年 1 月（「巻頭論文「東欧文学とは何か？　間（はざま）の世界の地詩学を求めて」11-40 頁を執筆）。

Nana Gelashvili と共編　*Dialogue between Gerogia and Japan: Exploring the History and Future of ScientificCultural Exchange (Proceedings)*, The University of Tokyo: Department of Contemporary Literary Studies, 2018.3.

野崎歓と共編著『ヨーロッパ文学の読み方—近代篇』放送大学教育振興会，2019 年 3 月。

望月哲男，池田嘉郎と共同編集代表『ロシア文化事典』丸善出版，2019 年 10 月。

巽孝之，木村朗子と共編『思想　危機の文学』（2019 年 11 月号）（巽孝之・木村朗子との共著で「提起　危機に立ち向かう文学」7-8 頁を執筆，また「世界（文学）とは何か？　理念，現実，実践，倫理」9-23 頁を執筆）。

C-3　監修

『世界の歴史と文化　中欧——ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリー』新潮社，1996 年 2 月（全体にわたる編集・監修，および中欧〔特にポーランド〕の文化・文学・音楽・演劇などの項目の一部執筆）。

『新版　ロシアを知る事典』平凡社，2004 年 1 月（川端香男里・佐藤経明・中村喜和・和田春樹・塩川伸明・栖原学と共同監修）。

『世界の国ぐに 35　ロシア』ポプラ社，2009 年 3 月（文・写真は吉田忠正）。

D　翻訳

D-1　訳書・編訳書

《ロシア語》アレクサンドル・グリーン『輝く世界』月刊ペン社，1978 年 12 月（訳者解説「伝説の息吹き，アレクサンドル・グリーン」283-300 頁）。1993 年 8 月に沖積舎より改訂版。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『金星応答なし』早川書房，1981 年 1 月（訳者あとがき「レムの青春」477-489 頁）。

《ロシア語》ヴェニアミン・カヴェーリン『師匠たちと弟子たち』月刊ペン社，1981 年 5 月（訳者解説「夢に見られて　ヴェニアミン・カヴェーリンの生涯と作品」221-251 頁）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム「ペテン師に囲まれた幻視者」『悪夢としてのＰ・Ｋ・ディック　人間，アンドロイド，機械』サンリオ，1986 年 8 月，204-235 頁。

《ロシア語》セルゲイ・エイゼンシュテイン「映画における第四次元」岩本憲児編『エイゼンシュテイン解読』フィルムアート社，1986 年 10 月，102-125 頁。

《ロシア語》ヨシフ・ブロツキー『大理石』白水社，1991 年 10 月（訳者解説「詩人と戯曲」128-137 頁）。

《ロシア語》ヨシフ・ブロツキー『私人　ノーベル賞受賞講演』群像社，1996 年 11 月（訳者解説，46-62 頁）。

《ポーランド語》ヴィスワヴァ・シンボルスカ『終わりと始まり』未知谷，1997 年 5 月（訳者解説「普遍のユートピアに抗して」105-126 頁）。

《ロシア語》セルゲイ・ドヴラートフ『わが家の人びと　ドヴラートフ家年代記』成文社，1997 年 10 月（訳者解説「世界は不条理で，人びとは可笑しく哀しい　簡潔なドヴラートフを長々しく称えて」199-200 頁）。

《ポーランド語》イグナツィ・クラシツキ『ミコワイ・ドシフィヤトチンスキの冒険』『ユートピア旅行記叢書　第 9 巻　東欧・ロシア』岩波書店，1998 年 9 月，1-208 頁（訳者解説「ポーランドの知　遠い島から来た男」387-406 頁）。

《ポーランド語》イグナツィ・クラシツキ「『寓話集』より」小原雅俊編『文学の贈物』未知谷，2000 年 6 月，171-180 頁。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム「対立物の統一　ホルヘ・L・ボルヘスの散文」澁澤龍彦ほか著『ボルヘスの世界』国書刊行会，2000 年 10 月，183-190 頁。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『ソラリス』国書刊行会，2004 年 9 月（訳者解説「愛を超えて」347-369 頁）　→　2015 年 4 月，ハヤカワ SF 文庫に収録。

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ『賜物』河出書房新社，2010 年 4 月（「訳者解説」585-612 頁）。

《ロシア語》アントン・チェーホフ『新訳　チェーホフ短篇集』集英社，2010 年 9 月（「あとがき」283－285 頁）。

《ロシア語》アントン・チェーホフ『かもめ』集英社，2012 年 8 月（訳者解説「カモメはいまでも飛んでいる」155-175 頁）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『ソラリス』早川書房（ハヤカワ文庫），2015 年 4 月。（27 の改訳文庫版）

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ『賜物』，ナボコフ『賜物　父の蝶』新潮社に所収，2019 年 7 月。2010 年河出書房新社版の改訂版。

D-2　共訳書・共編訳書

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『枯草熱』サンリオ，1979 年 9 月（全体にわたって吉上昭三と共訳）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『完全な真空』国書刊行会，1989 年 11 月（工藤幸雄・長谷見一雄と翻訳を分担。全 16 編のうち 13 編の翻訳を担当）。

《ロシア語》ブラート・オクジャワ『シーポフの冒険』群像社，1989 年 10 月（全体にわたって沼野恭子との共訳。訳者解説 420-429 頁も共著で執筆）。

《ポーランド語》「戦後ポーランド詩集」『ポーランド文学の贈り物』恒文社，1990 年 1 月，269-311 頁（関口時正ほか 13 人と翻訳を分担。詩の選出も担当）。

《ポーランド語》スワヴォーミル・ムロージェック『象』国書刊行会，1991 年 2 月（長谷見一雄・吉上昭三・西成彦と翻訳を分担。収録作品 42 編のうち 11 編の翻訳を担当）。

《フランス語・チェコ語》ミラン・クンデラ『微笑を誘う愛の物語』集英社，1992 年 6 月（千野栄一・西永良成と翻訳を分担。全 7 編のうち 2 編の翻訳を担当）。

《ロシア語》タチヤーナ・トルスタヤ『金色の玄関に』白水社，1995 年 4 月（全体にわたって沼野恭子と共訳。訳者あとがき「『もう一つのロシア文学』の輝かしい声」283-291 頁も共著で執筆）。

《ポーランド語》レシェク・コワコフスキ『ライロニア国物語』国書刊行会，1995 年 11 月（全体にわたって芝田文乃と共訳。訳者あとがき「ライロニアから来た道化のような哲学者」189-209 頁を執筆）。

《ロシア語》ピョートル・ワイリ，アレクサンドル・ゲニス『亡命ロシア料理』未知谷，1996 年 9 月（北川和美・守屋愛と翻訳を分担，全 45 章のうち 3 章の翻訳を担当したうえで全体を監修。訳者あとがき「誰も知らない，とても美味しいロシア」210-219 頁を執筆）。

《多言語》今福龍太・四方田犬彦と共編『世界文学のフロンティア』岩波書店，1996-97 年，全 6 巻。すべての巻にわたって共同編集。各巻の詳細は以下の通り。

第 4 巻『ノスタルジア』1996 年 11 月。

第 2 巻『愛のかたち』1996 年 11 月（巻頭論文「愛から出発するために」1-28 頁を執筆。またドヴラートフ「これは愛じゃない」41-65 頁，ルジェヴィッチ「愛 1944／なんてすてき」147-150 頁を翻訳）。

第 1 巻『旅のはざま』1996 年 12 月。

第 3 巻『夢のかけら』1997 年 1 月（巻頭論文「蕩尽された未来の後に」1-24 頁を執筆。またシンボルスカ「ユートピア／奇跡の市」167-174 頁，テルツ「金色のひも」257-269 頁を翻訳）。

第 5 巻『私の謎』1997 年 2 月。

第 6 巻『怒りと響き』1997 年 3 月。

《ロシア語》ロイ・メドヴェージェフ『1917 年のロシア革命』現代思潮社，1998 年 9 月（北川和美・横山陽子の共訳。石井規衛と共同で監訳。あとがき「ソ連反体制，メドヴェージェフ，そして『あの頃』のこと」201-219 頁を執筆）。

《ロシア語》アレクサンドル・グリーン『消えた太陽』国書刊行会，277 頁，1999 年 6 月（岩本和久と翻訳を分担，全 15 編のうち 6 編の翻訳を担当。訳者あとがき「ズルバガンから来た夢想の騎士」255-273 頁を執筆）。

《ロシア語・英語》ウラジーミル・ナボコフ『ナボコフ短篇全集』作品社，全 2 巻（第Ⅰ巻：2000 年 12 月，第Ⅱ巻：2001 年 7 月。秋草俊一郎・諫早勇一・貝澤哉・加藤光也・杉本一直・毛利公美・若島正と翻訳を分担。全 65 編のうち 13 編の翻訳を担当）。

《ロシア語》エドワード・ラジンスキー『真説ラスプーチン　上・下』日本放送出版協会，2004 年 3 月（望月哲男と共訳。下巻巻末解説「偉大な『空』としてのラスプーチン」433-441 頁を執筆）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『高い城・文学エッセイ』国書刊行会，2004 年 12 月（巽孝之・芝田文乃・加藤有子・井上暁子と共訳。「フィリップ・K・ディックにせ者たちに取り巻かれた幻視者」翻訳，「文学エッセイ」編者解説「レムにおける人生と批評と創作」を執筆）。

《ポーランド語》スタニスワフ・レム『天の声／枯草熱』国書刊行会，2005 年 10 月（深見弾・吉上昭三と共訳。訳者解説「〈九・一一以後〉にこそ読まれるべき作家レム」を執筆）。

《英語》チェスワフ・ミウォシュ『ポーランド文学史』未知谷，2006 年 5 月（関口時正・森安達也・西成彦・長谷見一雄と翻訳を分担し，第 11 章 729-877 頁を担当）。

《ポーランド語》『チェスワフ・ミウォシュ詩集』成文社，2011 年 11 月（関口時正との共編。編者後記「私たちのミウォシュ祭」189-194 頁を執筆）。

《ロシア語》アンドレイ・シニャフスキー『ソヴィエト文明の基礎』みすず書房，2013 年 12 月（平松潤奈・中野幸男・河尾基・奈倉有里と共訳。平松潤奈・中野幸男と訳者解説 401-416 頁を共著）。

《ロシア語》ウラジーミル・ナボコフ「ワルツの発明」『ナボコフ・コレクション——処刑への誘い　戯曲 事件　ワルツの発明』新潮社，2018 年 2 月，345-454 頁（小西昌隆・毛利公美と翻訳を分担。毛利公美と共同で解説「ナボコフと演劇」471-477 頁，また単独で「『事件』作品解説」478-491 頁を執筆）。

D-3　編纂・監修

《ロシア語》毎日コミュニケーションズ編『外国新聞に見る日本　第 2 巻――国際ニュース事典 1874～1895』マイナビ出版，1990 年（ロシア語部分の監訳）。

《ロシア語》アネッタ・サンドレル編『タルコフスキーの世界』キネマ旬報社，1995 年 9 月（全体にわたって監修，一部（約 30 頁分）翻訳を担当。監修者あとがき「タルコフスキーの帰還」552-557 頁を執筆）。

《ロシア語》フョードル・ドストエフスキー『鰐　ドストエフスキー　ユーモア小説集』小沼文彦・工藤精一郎・原卓也訳，講談社，2007 年 11 月（編集を担当。解説「ドストエフスキーはユーモア作家だった！」306-329 頁を執筆）。

《ロシア語》フョードル・ドストエフスキー『ポケットマスターピース 10　ドストエフスキー』高橋知之・番場俊・奈倉有里・江川卓・小泉猛訳，集英社，2016 年 7 月刊（編集を担当，高橋知之編集協力。解説「青春と笑い　ドストエフスキーとハグしあうために」780-799 頁を執筆）。

E 論文

《日本語》

「ユーリイ・オレーシャ『羨望』の成立」『ロシア語ロシア文学』12 号，72-86 頁。

「アメリカ合衆国におけるロシア語教育　ハーヴァード大学の場合」『言語文化センター紀要』6 号，28-42 頁。

「ソビエト文学におけるドストエーフスキイ　オレーシャとレオーノフの場合」『ドストエーフスキイ研究』3 号，34-46 頁。

「ミコワイ・センプ=シャジンスキの逆説の世界　『ソネット』Ｉの文法的迷宮解読の試み」『西スラヴ学論集』1 号，13-36 頁。

「ゴルバチョフ政権と文学界の“グラスノスチ”　1986 年のロシア文学概観」『ソ連研究』4 号，29-48 頁。

「東欧からの移民の天国と地獄」『ＧＳ』6 号，332-348 頁。

「ソビエト文学の現況と翻訳・研究 ’86 」『文芸年鑑 1987』新潮社，1987 年，147-150 頁。

「流謫の言語・亡命文学の栄光と悲惨」『講座 20 世紀の芸術 5　言語の冒険』岩波書店，1988 年，323-354 頁。

「非スターリン化の新たな波　1987 年のソビエト文学」『ゴルバチョフの社会改革』外務省欧亜局ソヴィエト連邦課，1988 年，71-92 頁。

「ユートピア的想像力の類型学　ロシア文学の場合」東大由良ゼミ準備委員会編『文化のモザイック　第二人類の異化と希望』緑書房，1989 年，129-139 頁。

「クンデラはどうしてドストエフスキーが嫌いなのか」『ユリイカ』1991 年 2 月号，150-157 頁。

「ロシア・東欧文学の現況と翻訳・研究‘90」『文芸年鑑 1991』新潮社，1991 年，148-152 頁。

「劇作家オレーシャ　ドストエフスキーの長編『白痴』の脚色をめぐって」『20 世紀の芸術表象における〈演劇性〉についての総合的研究』科研費報告書，表象文化論研究室，1991，49-60 頁。

「煽動の図像学　革命後ソ連の政治ポスター覚書」『ルプレザンタシオン』1 号，95-102 頁。

「ナボコフはどれくらいロシアの作家か？」『ユリイカ』1991 年 10 月号, 100-107 頁。

「ソビエト・東欧文学の現況と翻訳・研究‘90」『文芸年鑑 1991』新潮社，1991 年，148-152 頁。

「チュルリョーニスとリトアニア文化　ヨーロッパの「辺境」からやってきた幻視者」『チュルリョーニス展　分冊 2』セゾン美術館，1992 年，9-14 頁。

「二つの星の出会い　ソロヴィヨフとドストエフスキー」『交錯する言語　新谷敬三郎教授古希記念論文集』名著普及会，1992 年，217-232 頁。

「ロシア・東欧文学の現況と翻訳・研究‘91」『文芸年鑑 1992』新潮社，1992 年，143-147 頁。

「ラトヴィア語を話す犬　ソ連邦崩壊後の民族対立と言語」『言語』1992 年 9 月号，38-45 頁。

「とどまる力と越えて行く流れ　ポスト共産主義時代の民族，亡命，そして文学」『越境する世界文学』河出書房新社，1992 年，47-58 頁。

「宇宙の幻視者　ツィオルコフスキーとロシア・ユートピア思想の系譜」『文藝』1993 年 5 月号，307-321 頁。

「ロシア文学は一つになったのか？　亡命文学の再評価に向けて」『窓』1993 年 6 月号，6-14 頁。

「空飛ぶ共産主義　ボグダーノフの火星ユートピア」『へるめす』43 号，1-12 頁。

「ユートピアからメタ・ユートピアへ」『ユリイカ』1993 年 12 月号，158-165 頁。

「ロシア文学の多民族的世界」『青丘』19 号，72-79 頁。

「歴史と民族の交差する場所で　カントとリトアニア・ロシア文化」『現代思想』1994 年 3 月臨時増刊号，121-128 頁。

「『大きな物語』の解体　ペレストロイカからポストモダン的世界観へ」『ロシア研究』18 号，88-108 頁。

「転形期の前衛　花田清輝とアヴァンギャルド芸術の理論」『Slavisitika』XI，666-683 頁。

「「文化としてのスターリン時代」へ」『思想』1996 年 4 月号，163-180 頁。

「ロシア文学における主流と非主流　文学史の新たな組み替えを目指して」川端香男里・中村喜和・望月哲男編『講座スラブの世界 1　スラブの文化』弘文堂，1996 年，291-318 頁。

「統制から「想像力の大いなる野」へ　ロシアの社会変動と児童文学」『日本児童文学』1996 年 6 月号，34-43 頁。

「ロシア文学のクレオール性について」『現代思想』1997 年 1 月号，230-237 頁。

「世界の中の大江健三郎」『國文學』1997 年 2 月臨時増刊号，198-203 頁。

「世界の中の安部公房」『國文學』1997 年 8 月号，12-18 頁。

「仮死と再生　亡命ロシア人の見たアメリカ」『スラブ・ユーラシアの変動　その社会・文化的諸相（平成 8 年度冬期研究報告会報告集）』北海道大学スラブ研究センター，1997 年 6 月，293-301 頁。

「ロシア文学の現況と翻訳・研究 ’98」『文芸年鑑 1999』新潮社，1999 年，122-125 頁。

「日本人のポーランド文学との出会い Spotkanie japończyków z literaturą polską」『ショパン・ポーランド・日本展』（カタログ），日本・ポーランド国交樹立 80 周年および国際ショパン年記念事業編集発行，1999 年，206-213 頁（日本語とポーランド語のバイリンガル版。ポーランド語訳は Agnieszka Plaur による）。

「あなたは花や葉に満ちた枝のように……　ユーリイ・オレーシャの比喩と人生」小林康夫・松浦寿輝編『表象のディスクール②　テクスト　危機の言説』東京大学出版会，2000 年，73-100 頁。

「「間（あいだ）」の文学？　現代ロシア小説の新しい潮流について」『窓』2001 年 3 月号，2-8 頁。

「仲良しウサちゃんと大喧嘩　ナボコフとウィルソンの奇妙な関係」『英語青年』2001 年 6 月号，34-36 頁。

「アレクサンドル・ロトチェンコ『母の肖像』」『現代思想』2001 年 9 月号，190-195 頁。

「ナボコフの幽霊たち　生と死の境界での『明視』」『Krug/Kpyr』2002 年 6 月号 ，13-16 頁。

「ポスト社会主義の文学　ロシア・東欧における文化的アイデンティティの模索」『神奈川大学評論』2002，98-105 頁。

「共産主義社会の日用品（ロシア）　ユートピア的な夢と欠乏の現実」近藤雅樹編『二十世紀における諸民族文化の伝統と変容 8　日用品の二〇世紀』ドメス出版, 2003 年 3 月，28−44 頁（なお，48-49 頁および 287-296 頁の討論にも参加）。

「日露文化交流の活性化に向けて」『NIRA 政策研究』Vol.17, No.4，53-55 頁。

「レーニン神話の崩壊　エロフェーエフ『馬鹿と暮らして』」科研費研究成果報告書『転換期ロシアの文芸における時空間イメージの総合的研究』（14310217，研究代表者望月哲男），2005 年 5 月，41-50 頁。

「レムとソルジェニーツィン　二人の現代作家に見るロシア東欧の「ユダヤ人問題」，ユダヤ人のアイデンティティ問題から見た近代国民国家の理念と現実」科研費研究成果報告書『ユダヤ人問題』（科学研究費基盤研究(B)共同研究〔代表市川裕〕研究報告書），2006 年 3 月，71-84 頁。

「さまざまな声のカーニバル　ドストエフスキー研究と批評の流れを瞥見する」『すばる』2007 年 4 月号，227-231 頁。

「宇宙旅行の詩学　ソ連 SF と政治イデオロギー」『文学』2007 年 7・8 月号，64-79 頁。

「魂の生成とユートピア探索の場としての小説　『未成年』覚書」『ユリイカ』2007 年 11 月号，118-125 頁。

「中欧文学と地域アイデンティティ　現代文学を通じての〈中（東）欧意識〉再検討の試み」科学研究費研究成果報告書『越境する文学の総合的研究』32-51 頁，2008 年 3 月。

「新しい世界文学の場所へ　大きな楊文学についての小さな論」『文学界』2008 年 9 月号，226-231 頁。

「レーリッヒの美術」『演劇映像学 2007 報告集 1』早稲田大学演劇博物館グローバル COE プログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」2009 年，　245-254 頁。

「さまよえる境界，捏造された幻影　中（東）欧文学の〈地詩学〉を求めて」『思想』2012 年 4 月号，292-297 頁。

「タスカー考　「ふさぎの虫」から「せつない」へ」『文学』2012 年 7・8 月号，81-96 頁。

「亡命詩人，娼婦たち，それともナボコフ　間違えたのは誰か？（『賜物』におけるある誤植をめぐって）」『れにくさ』第 5 号第 1 巻，100-121 頁。

「ハーヴァード大学におけるホレス・G・ラント教授による古代教会スラヴ語の授業」『Slavistika』XXX，19-30 頁。

「ナボコフと「ソ連」文学　ナボコフ『ロシア文学講義』への補遺として（ナボコフが論じなかったロシア文学）」『Krug/Kpyr』2014 年 7 月号，42-51 頁。

「サハリンへ！　両義性の島，サバルタンの植民地（チェーホフとロシアの世紀末 13）」『群像』2015 年 5 月号，272-288 頁。

「ロシア人は村上春樹がお好き？――源氏物語から村上春樹まで　ロシアにおける日本文学の受容」『ユーラシア研究』52 号，2-7 頁。

「親不孝娘の冒険，あるいは人生が芸術を模倣することについて（アヴィーロヴァとチェーホフ）」『SLAVISTIKA』XXXI，257-272 頁。

「村上春樹とドストエフスキー　現代日本文学におけるロシア文学の影響をめぐって」小森陽一・曾桂秋編『村上春樹における両義性』淡江大學出版中心，2016 年 6 月，83-108 頁。

「ヤコブソンとナボコフの確執をめぐって　象, イーゴリ, スパイ」『SLAVISTIKA』XXXII，41-60 頁。

「聖書とウィスキー　ロシア人はフォークナーをどう読んできたか」『フォークナー』20 号，1-14 頁。

《英語》

“Evergreen with Envy: Jurij Olesa and Fantastic Literature,” 『外国語科研究紀要』34-4 (1986): 23-53.

“Japanese Literature Across Borders,” *Japanese Book News* 19 (1997): 3-4.

“Aspects of Post-Utopian Imagination: The Cases of Brodsky, P’etukh, Petrushevskaya, and Makanin,” *Slavistika* XIV (1998): 52-62.

“Is There Such a Thing as Central (Eastern) European Literature? An Attempt to Reconsider ‘Central European’ Consicousness on the Basis of Contemporary Literature,” *Slavic Eurasian Studies*, No.15 (2007): 121-136.

"Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shift in the Global Context,"『れにくさ』1 (March 2009): 188-203.

"The River as a Metaphor for Human Experience: Adam Mickiewicz's 'Nad wodą wielką i czystą' in Comparison with Tadeusz Różewicz's 'Lyriki lozańskie' and Czesław Miłosz's 'Rzeki'," 『西スラヴ学論集』No.14 (April 2011): 71-88.

"The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Murakami Goes to Sakhalin," *Japanese Slavic and East European Studies*, 35 (October 2014): 5-12.

"The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880s to the Present: Some Remarks on Its Peculiarities" 『れにくさ』6 (March 2016): 333-341.

《ロシア語》

Судьба искусства Юрия Олеши: его жизнь в метафорах // Новый журнал. 1981. № 145. С. 59-76.（Rimgaila Salys, ed., *Olesha's Envy: A Critical Companion*, Northwestern University Press, 1999 の Bibliography, p.146 で "Best article on Olesha's metaphors"と評される。）

Утопическое воображение в русской литературе в начале XX века // *Japanese Contributions to the Tenth International Congress of Slavists: Sophia, Sept. 1988* (1988): 105-126.

Двойственность и однолинейность: становление личности Аркадия в романе Достоевского «Подросток» // *Japanese Slavic and East European Studies* 10 (1989): 7-30.

Комментарий к рассказу Юрия Олеши «Любовь»: Опыт медленного чтения //『外国語科研究紀要』（東京大学教養学部外国語科）39-5 (1992): 49-68.

Набоков и Олеша: сравнительный подход к их искусству видеть мир // *Japanese Contributions to the XIth International Congress of Slavists: Bratislava, Aug.-Sept.1993*: 67-92.

Масштаб вечности: мотивы солнца и луны в романе Вулгакова «Мастер и Маргарита» //『20 世紀ロシア・ソビエト文学におけるユートピアとアンチ・ユートピア』（科研費報告書，東京大学教養学部ロシア語教室，1994）: 7-26.

О не совсем русской поэтике Довлатова // *Slasvistika* XIII (1997): 151-162.

Мои встречи (и невстречи) с Сергеем Донатовичем. Японская довлатовиана // Сергей Довлатов: творчество, личность, судьба / Под ред. А.Ю. Арьева. СПб., 1999. С. 224 - 231.

Тюкан Сесэцу: Пелевин, Акунин и Мураками успешно заполняют лакуну // *Exlibris NG* (Moscow), Dec. 7, 2000, p. 3. 〔以下は，タイトルが少し変更されているが，ほぼ同じ内容の論文の再録である。Пелевин, Акунин и Мураками: Писатели, заполняющие «лакуну» между серьезной и массовой литературой. *Slavistika* XVI/XVII. 2000/2001. C. 197-210.〕

Граница японской литературы и ее сдвиги в мировом контексте // «Иностранная литература» 2002 № 8. C. 242-248.

Японский язык на пути к мировой литературе // «Путь кисти и меча» 2002. № 3.C. 44-45.

«Женщины как четыре квадранта мировоззрения: Метонимическое средство в «Спекторском» и «Повести» Пастернака» // SLAVISTIKA XXVII. 2012. C.73-102.

Женщина как метонимическое средство представления мира: жинеские фигуры в «Спекторском» и «Повести» Пастернака // Језик, књижњвност, култура: Новици Петковићу у част: зборник радова, Special Issue 34(2012): 757-785.

Харуки против Карамазовых: Влияние «Великой русской литературы» на современную японскую литературу // ヴェルボンド/ Velbond. 2012. № 1. C. 170-189.

Переводы В. В. Набокова и А. П. Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики // Found in Translation: Transformation, Adaptation and Cross-Cultural Transfer, 2016(195-200).

К изучению истории «истоии руской литературы» в Японии. Конспект доклада //『れにくさ』7 (March2017): 160-167.

《ポーランド語》

"Przeciw utopii powszechnego szczęścia. O poezji Wisławy Szymborskiej," *Slavistika* XII (1997): 60-66.

”List z Tokio. Japońskie ścieżki,” *Literatura na świecie,* Nr. 1-2-3/2002, str. 407-414. (ポーランド語訳 Jan Filipek)

F　学会発表，講演など

《日本語》（2003 年以降に限る）

第3回日露フォーラム第３セッション「日露両国の相互理解･対話の深化を目指して」招待パネリスト，総合研究開発機構（イルクーツク），2003 年 9 月。

「文化としてのスターリン時代へ」シンポジウム「プロコフィエフ『戦争と平和』スターリン」での報告，ロシア連邦大使館，2003 年 10 月。

日本ロシア文学会プレシンポジウム「ヴィヴァ！　聖ペテルブルグの魅力を語る」大阪国際交流センター，2003 年 10 月。

「イリヤ・カバコフの芸術」森美術館，2004 年 5 月。

第 9 回東京外国語大学中野健三基金シンポジウム「永遠と一日，あるいは 21 世紀のチェーホフ　チェーホフ没後 100 年記念シンポジウム」東京外国語大学, 2004 年 12 月。

シンポジウム「ズビャギンツェフを迎えて　現代ロシア映画の世界　タルコフスキーから『父，帰る』へ」東京外国語大学，2005 年 1 月。

シンポジウム「ヴィトルド・ゴンブローヴィチ生誕 100 年記念・京都会議」立命館大学，2005 年 1 月。

「ソルジェニーツィンとユダヤ問題」研究会「近現代世界におけるユダヤ人—民族的アイデンティティと国家のはざまで」北海道大学スラブ研究センター，2005 年 6 月（報告者兼コーディネーター）。

「越境の詩学に向けて」神戸ドイツ文学会シンポジウム「境界を引く・境界を超えるナショナリズムと越境」甲南大学，2005 年 7 月。

「二人の佳人の出会い　日本とポーランドの文化交流の歴史から（日本におけるポーランド文学受容を中心に）」*International Conference: Japanese Studies in the 21st Century — Beyond Borders: In Memoriam Wiesław Kotańsk,* ワルシャワ大学，2006 年 5 月。

シンポジウム「ロシア東欧の亡命文学——越境文学の現状をめぐって」名古屋市立大学，2006 年 12 月。

「もっとも重厚にして最先端　ロシア文学紹介のトップランナーとしての昇曙夢」昇曙夢没後 50 周年記念を偲ぶシンポジウム「昇曙夢の生涯と業績を語る」奄美サンプラザホテル，2007 年 5 月。

「亡命文学再論　〈脱領域の知性〉か，ET か？」公開フォーラム〈誘惑と越境〉第２部　越境——文学・美術・文化財，東京大学法文 2 号館，2007 年 7 月。

「宇宙から呼びかける二羽のカモメ　現代日本小説におけるロシア人のイメージ」国際日本文化研究センター平成 20 年度海外研究交流シンポジウム「ロシア極東文化の中の日本」ウラジオストク極東大学，2008 年 9 月。

「美女と醜女，または翻訳可能性と不可能性の間で」ワークショップ「ロシア文学にとって翻訳とは何か？　理論・実践・受容」中京大学（日本ロシア文学会全国大会），2008 年 10 月。

「エステルハージと中欧文学の「地詩学」　ドナウを下って，世界文学の未来へ」大阪大学グローバルＣＯＥ「コンフリクトの人文学」国際研究教育拠点主催シンポジウム「中欧の詩学」大阪大学豊中キャンパス，2009 年 2 月。

「芸術は何を超えていく（超えていかない）のか？」日本学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト研究事業シンポジウム「芸術は誰のものか？」KOKUYO ホール，2009 年 3 月。

「ロシア文学者としての内村剛介」第 21 回上智大学ロシア研究シンポジウム，上智大学，2010 年 2 月。

「翻訳で迷子になって　Lost in Translation」ロシア語通訳協会 30 周年記念集会，上智大学，2010 年 11 月。

ユーラシア研究所創立 20 周年記念講演「光源氏 vs. カラマーゾフ　ロシアと日本文学が映し出す互いの姿」2009 年 12 月。

日本ロシア文学会中部支部講演会「チェーホフの新訳をめぐって」中京大学，2012 年 2 月。

「村上春樹 vs カラマーゾフ　現代日本の翻訳文化と世界文学」岡山大学文学部，2013 年 3 月。

「「一」と「多」の間で　外の境界と内なる境界（現代ロシア文学と映画の例に基づいて）」ロシア・東欧学会，津田塾大学，2013 年 10 月。

「日本文学の「国際化」と新しい越境文学のありかた」*Japanese Civilization: Tokens and Manifestations*, 日本美術技術博物館 Manggha（クラクフ），2013 年 11 月。

「ドイツ語圏中欧とスラヴ文化　フロイト，リルケ，カフカ」日本オーストリア文学会，麗澤大学，2014 年 5 月。

「ロシア人は村上春樹がお好き？　源氏物語から１Ｑ８４まで――ロシアにおける日本文学の受容」，シンポジウム「ロシアの COOL JAPAN」聖心女子大学，2014 年 5 月。

「村上春樹 vs. カラマーゾフ　現代日本の翻訳文化と世界文学」*International Japanese-English Translation Conference*, 東京ビッグサイト，2014 年 6 月。

「ユーラシア世界を知るための市民教養講座企画・コーディネート「ロシア東欧の文化と芸術」千葉商工会議所，2015 年 6 月-2015 年 7 月。

「世界を旅する 14 ポーランド・ツアー」（リレー講義組織・コーディネート）かわさき市民アカデミー，2015 年 10 月-2016 年 1 月。

「特別講演　日本におけるロシア文学の翻訳と受容　二葉亭四迷から村上春樹まで」

群馬県立土屋文明記念文学館，2015 年 10 月。

「〈ロシア人は好きだが，ロシアは好きじゃない〉　ポーランドとその巨大な隣国のねじれた関係について（文学の例に基づいて）」2015 年度フォーラム・ポーランド会議「ポーランドと隣人たち」青山学院大学アスタジオ，2015 年 12 月。

「ハルキ vs. カラマーゾフ　現代日本文学における「偉大なるロシア文学」の影」台湾日本語文学学術研討会，輔仁大学，2015 年 12 月。

招待講演「20 世紀日本の＜戦争と平和＞――加賀乙彦の大河小説『永遠の都』と『雲の都』を読む」，*The10th Days of Japan at the University of Warsaw*，ワルシャワ大学（ポーランド），2016 年 10 月。

JASRAC 講座ミュージック・ジャンクション「世界を旅する音楽　ウクライナの音楽と文学」（ナターシャ・グジーと）JASRAC けやきホール，2017 年 1 月。

「古典戯曲連続講座第 2 回　チェーホフ――チェーホフは森のキノコです」京都芸術センター，2017 年 3 月。

「ドストエフスキー，トルストイ，チェーホフ　ロシア文学の鬱蒼たる森を探索する」東京大学文学部法文 2 号館（第 8 回東京大学文学部公開講座），2017 年 6 月。

「基調講演　「人間ならざる者たち」の魅惑と恐怖」，淡江大学主催第 6 回村上春樹国際シンポジウム，同志社大学，2017 年 7 月。

「トランプ・プーチン時代のロシア東欧の文化事情」ロシア・東欧学会，津田塾大学，2017 年 10 月。

「チェーホフの『サハリン島』をめぐって」北海道立文学館，2017 年 10 月（池澤夏樹との公開対談）。

「ナボコフ・コレクション（新潮社）全 5 巻刊行記念公開対談」（多和田葉子と）新宿紀伊國屋書店，2017 年 11 月。

「上智大学公開学習センター講義――日本人とロシア文学　内田魯庵から村上春樹まで」上智大学，2017 年 11 月。

「NHK『100 分 de 名著』特別講座　世界文学を徹底的に語りつくす――ドストエフスキーからカズオ・イシグロまで」NHK 文化センター青山教室，2018 年 1 月（島田雅彦と）。

2018 年 4 月 14 日（土）シンポジウム「世界文学を可能にしているのは翻訳である」日仏会館国際シンポジウム「世界文学の可能性――日仏翻訳の遠近法」日仏会館（東京），2018 年 4 月。

招待講演「大江健三郎と世界文学――周縁から普遍へ」第四回大江健三郎文学研討会，紹興越秀外国語学院（中国），2019 年 3 月。

《英語》

"Aspects of Post-utopian Imagination: The Cases of Brodsky, P'etukh, Petrushevskaya, and Makanin," *International Conference on Communist and Post-Communist Societies,* The University of Melbourne, July 1999.

"The Position of Viktor Pelevin and Boris Akunin in Contemporary Russian Literature," *VI ICCEESWorld Congress*, Tampere, Finland, July 2000.

"The Russo-Japanese War and Russian Literature," *Re-imagining Culture in the Russo-Japanese* War, Birkbeck, University of London, March 2004.

"On Stylistic Exuberance of *The Gift* as a Russian Novel," *International Nabokov Conference in Kyoto* (organized by The Japan Nabokov Society), March 2010.

"Toward the New Age of World Literature," *International Seminar: Redefining World Literature(s)* , University of Indonesia, July 2006.

"Toward a New Age of World Literature: The Boundary of Contemporary Japanese Literature and Its Shifts in the Global Context," Language, Literature, Culture, Identity," Belgrade University, September 2008.

"Haruki vs. Karamazov: Contemporary Japanese Literature under the Shadow of the Great Russian Literature," *Todai-Yale Initiative Lecture Series,* Yale University, December 2009.

"Film Adaptations of Stanislaw Lem's *Solaris*," *2nd Symposium on Comparative Literature: Reform, Reuse and Recycle,* 神奈川大学, June 2012.

"Shifting Borders in Contemporary Japanese Literature," Concept Laboratory: Approaches to World Literature," *Concept laboratory: Approaches to World Literature,* Dahlem Humanities Center in cooperation with the Friedrich Schlegel Graduate School, Freie Universität Berlin, June 2012.

"The Seagull Goes to the Cosmos, and Haruki Goes to Sakhalin," Key Note Speech, *5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies,* 大阪経済法科大学, August 2013.

"Japanese Literature in the Post-3/11 Era," *Dialogue of Armenian, Russian and Japanese Cultures: The Experience of Comparative Analysis*, Russian-Armenian University (Yerevan), September 2013.

“The Role of Russian Literature in the Development of Modern Japanese Literature from the 1880’s to the 1930’s: Some Remarks on Its Peculiarities,” *Russia in East Asia: Imagination, Exchange, Travel, Translation,* Columbia University, February 2014.

“Russian Literature in Japan: Translation, Reception, and Influence,” II International Conference on Methods of Teaching Oriental Languages: Actual Problems and Trends, Higher School of Economice (Moscow), May 2014.

“Pasternak in Japan: Reception and Translation,” *Poetry and Politics in the 20th Century: Boris Pasternak, His Family, and His Novel Doctor Zhivago,* Stanford University, September 2015.

“Contemporary Tendencies in the Study of Russian and Soviet Literature in Japan: Toward an East Asian Network of Scholars,” *East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies,* 華東師範大学, September 2016.

“Sarkatvelo Dreaming: Reception of Georgian Images in Japan through Russian Literature,” *Dialogue Between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange,* Ivane Javakhishvili Tbilisi State University, June 2017.

“Japanese Literature after World War II: Kawabata, Abe, Oe, and Murakami,” *Global Japan Studies Summer Program 2017*, Instittute for Advanced Studies on Asia, University of Tokyo, Augutst 2017.

“Strange Encounters of the Two ‘Beautiful Ladies’: Mutual Interest and Influence between Japanese and Polish Literature,” *The13 th Days of Japan,* University of Warsaw, October 2019.

《ロシア語》

«Восприятие Набокова в Японии» 第 2 回国際ナボコフ学会（サンクト・ペテルブルク），ナボコフ基金主催，1994 年 4 月。

«О не совсем русской поэтике Довлатова» アメリカ AAASS 年次大会（シアトル），1997 年 11 月。

«Мои встречи (и невстречи) с Сергеем Донатовичем. Японская довлатовиана» 第 1 回国際ドヴラートフ学会（サンクト・ペテルブルク），1998 年 5 月。

«Пушкин и Набоков в Японии» プーシキン生誕 200 年・ナボコフ生誕 100 年記念国際学会（サンクト・ペテルブルク，科学アカデミーロシア文学研究所），1999 年 4 月。

«Рериховедение в Японии» レーリッヒ国際学会（モスクワ東洋美術館），1999 年 10 月。

«Гриномания в Японии» アレクサンドル・グリーン国際学会（フェオドシア，アレクサンドル・グリーン博物館），2000 年 9 月。

«Образ русских в современной японской литературе» シンポジウム「日本とロシア——相互イメージの中で」（モスクワ，ロシア国立人文大学），ロシア国立人文大学東洋文化研究所， 2000 年 10 月。

«Взаимопонимание через литературу: русская литература в Японии и японская литература в России» 連続講演：モスクワ国立大学ジャーナリズム学部，2002 年 10 月 2 日，モスクワ国立大学文学部，2002 年 10 月 31 日，モスクワ日本センター「ミルビス」，2002 年 10 月 31 日。

「日露両国の相互理解・対話の深化をめざして」第 3 回日露フォーラム第 3 セッション（イルクーツク），総合研究開発機構，2003 年 9 月 12〜13 日。

«Восприятие творчества Булата Окуджавы в Японии» 第 3 回国際オクジャワ学会（ペレジェールキノ，国立ブラート・オクジャワ記念博物館），2005 年 3 月 18 日。

«Олеша и Набоков. Сравнительный подход к их искусству видеть мир»（サンクト・ペテルブルク，ナボコフ記念館），国際学会「ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア文学」，2005 年 7 月 21〜23 日。

«Современная японская литература и мировой контекст» 第 8 回「日本の歴史と文化」会議，ロシア国立人文大学，2006 年 2 月 15 日。

「日本におけるロシア文学の翻訳の新しい傾向」第 1 回国際翻訳者会議，モスクワ（全ロシア外国文献図書館），2010 月 9 月 3 日。

«Харуки против Карамазовых: Влияние «Великой русской литературы на современную японскую литературу» 中国社会科学院ロシア文学研究部会，中国社会科学院（北京），2012 年 3 月 16 日。

«Переводя Чехова и Набокова на японский: какие трудности переводчик должен преодолеть» II Международный конгресс литературных переводчиков ロシア国立外国文献図書館，2012 年 9 月 7 日。

«Русская литература в Японии сегодня: перевод, восприятие и влияние» ロシア国立外国文献図書館， 2012 年 9 月 8 日。

«В Японии очень мало знают о реальных русских людях» (интервью), Спецпроекты ЛГ (Звёзды мировой русистики. Наш человек в Японии, «Лететатурная газета» 15.1.2014.

«Переводы В.В.Набокова и А.П.Чехова на японский язык: о необходимости нового перевода классики», III Международный конгресс преводчиков художественной литературы, Библиотека иностранной литературы (Москва), 5.9.2014.

«Киргизская литература в Японнии. Манас и Чингиз Айтматов», Aitmatov Literary Forum, Manas University, Bishkek, 30.09.2014.

«К изучению истории «истоии русской литературы» в Японии», Международная конференция «Национальные истории русской литератуы», 首都師範大学（北京，中国），24.11.2015.

«Составляя новую антологию русской поэзии» 第 4 回国際翻訳者会議（モスクワ），8-11.9.2016.

特別連続講演 (1) «О современной японской литературеВосприятие русской литературы в Японии сегодня», (2) «Переводя Чехова снова на японский язык», Музей кн. Чехова «Остров Сахалин», Южно-Сахалинск，25.05.2017.

«Чайка летит в космос, а Харуки -- на Сахалин» 国際学術シンポジウム「チェーホフとサハリン島の文学」（サハリン・チェーホフ「サハリン島」博物館と共催），東京大学文学部，2017 年 10 月 12 日。

《ポーランド語》

“Stanislaw Lem i ja,” Kongres LEMologiczny (レム学会議), Kraków, Wydacnictwo Literackie, 14.5.2005.

G　会議組織，チェアなど

東大国際シンポジウム「ロシアはどこへ行く？　歴史・文化・社会」東京大学山上会館，1996 年 9 月（報告「〈未来の後〉のロシア文学・ポスト共産主義，ポスト・ユートピア，ポストモダン」も行う）。

国際シンポジウム「ユーラシアの風　詩・音楽・映画に見るロシア文化の広がりと日本」東京大学文学部 1 番大教室，1997 年 12 月。

水戸美術館主催シンポジウム「未来の後に未来はあるか　現代美術の模索と可能性」国際交流基金国際会議場，1999 年 10 月。

第 1 回日露作家会議（モスクワ，ロシア国立外国文学図書館），国際交流基金助成，2000 年 3 月（円卓会議の司会。参加者：島田雅彦，多和田葉子，山田詠美，ボリス・アクーニン，ウラジーミル・ソローキン，タチヤーナ・トルスタヤ）

〈東京―モスクワ 2001〉第 2 回日露作家会議，東京大学山上会館，2001 年 10 月（共編『日露作家会議〈モスクワ―東京 2001〉資料集』全 8 巻の編集も担当）。

シンポジウム「スターリンとは何だったのか」東京大学法文 2 号館，2003 年 7 月。

国際シンポジウム「21 世紀のチェーホフ」アートスフィア，2004 年 9 月（事務局長）。

日本ロシア文学会プレシンポジウム「時空を超えて今チェーホフを語る」稚内北星学園大学，2004 年 10 月。

ヤーン・カプリンスキ講演・朗読会「さまよう境界　言語と詩学をめぐって」東京大学文学部法文 2 号館，2004 年 11 月。

シンポジウム「ロシアの作家ボリス・アクーニンを迎えて　現代ロシア小説の最前線」東京大学法文 2 号館，2005 年 6 月。

しずおか世界翻訳コンクール 10 周年記念国際文学シンポジウム，静岡市，2005 年 9 月（企画協力のほかトークセッション出演）。

国際シンポジウム＆ワークショップ「春樹をめぐる冒険　世界は村上文学をどう読むか」東京大学教養学部，2006 年 3 月（企画委員およびチェアパネルとして「翻訳本の表紙を比べる」，ワークショップとして「翻訳の現場から」を実施）。

「ヴィヴァ，カラマーゾフ！　ロシア文学古典新訳を考える」東京大学文学部法文２号館，2007 年 7 月。

2009 年度国際交流基金賞受賞者記念講演会「ボリス・アクーニン『日本と私』」東京大学文学部法文２号館，2009 年 10 月。

日本学術会議助成国際研究集会 World Literature and Japanese Literature in the Era of Globalization: In Search of a New Canon（グローバル化時代の世界文学と日本文学新たなカノンを求めて）東京大学山上会館，2013 年 3 月。

第 9 回国際中欧・東欧協議会世界大会，幕張メッセおよび神田外語大学， 2015 年 8 月（下斗米伸夫と共同組織委員長）。

ポーランドの国民作家シェンキェヴィチ生誕 170 周年・没後 100 周年記念特別企画「講演　ヘンリク・シェンキェヴィチの生涯と作品」東京大学文学部法文 2 号館，2016 年 6 月。

シンポジウム「『ディブック』　その成立と受容をめぐって」東京大学文学部法文 2 号館，2016 年 2 月（記録映画の上映も実施）。

第 2 回 JLPP 翻訳コンクール授賞式およびシンポジウム「現代日本文学の翻訳作家と翻訳家の対話」日本近代文学館，2016 年 3 月。

第 4 回世界文学・語圏横断ネットワーク「いま世界（の）文学をどう読むか？研究・教育・出版」（パネルのチェア）東京大学文学部法文 2 号館，2016 年 4 月。

「ノーベル賞受賞作家アレクシエーヴィチとの対話　『戦争は女の顔をしていない』から『セカンドハンドの時代へ』」東京大学文学部法文 2 号館，2016 年 11 月。

東京大学・トビリシ国立大学共催シンポジウム Dialogue between Georgia and Japan: Exploring the History and Future of Scientific and Cultural Exchange トビリシ国立大学，2017 年 6 月 26 日～29 日。

国際学術シンポジウム「チェーホフとサハリン島の文学」主催（サハ リン・チェーホフ『Sakhalin 島』博物館と共催，東京大学文学部，2017 年 10 月 12 日。

EU 文学フェスティバル企画「ヨーロッパ文学の最前線　Rein Raud との対談」日欧州連合代表部ヨーロッパハウス，2017 年 11 月。

「ポーランドの SF 小説家スタニスワフ・レムの夕べ（日本未公開映画上映とパネルディスカッション）」代官山ツタヤ，2017 年 11 月。

ハーヴァード大学世界文学研究所夏期集中セミナー東京大学セッション実施責任者，東京大学，2018 年 7 月 2 日～26 日（現代文芸論研究室に事務局を置き，スラヴ語スラヴ文学研究室が協力した）。

The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies（第 10 回スラヴ・ユーラシア研究東アジア大会）副組織委員長，東京大学。2019 年 6 月 28 日～30 日。

丸善出版『ロシア文化事典』刊行記念シンポジウム「ロシアの謎，魅惑の文化」東京大学文学部 1 番大教室，2020 年 2 月。